

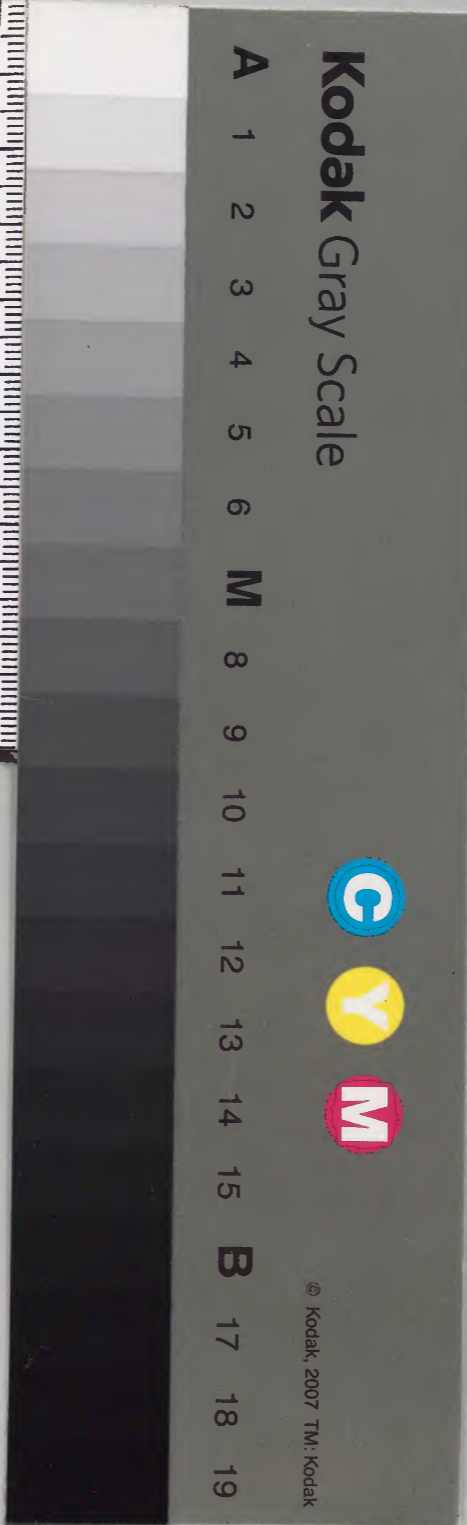
塩一丸

五十四

大 政 官 文 庫			
		一	和
		二	書
		四	門
		九	
六	一	七	
五	二	函	
冊	架	冊	

内 閣 文 庫			
		一	和
		二	書
		四	
		九	
二	一	七	
函	方	冊	
二	五	架	
二	冊	架	

内 閣 文 庫	
番 號	和 11497
冊 數	65 (54)
函 號	211 302



教諭省
文庫
清印
小

同書
同書
同書

文庫
同書

以小善為无益而弗為也
以小惡為无傷

而弗去也
故思積積而不可掩罪大而不可解之

而弗去也
故思積積而不可掩罪大而不可解之
子子諱諱鳴呼鳴呼喜喜の小身身ああげげ捨捨とと惡惡の小キキな
子子諱諱鳴呼鳴呼喜喜の小身身ああげげ捨捨とと惡惡の小キキな
子子諱諱鳴呼鳴呼喜喜の小身身ああげげ捨捨とと惡惡の小キキな
子子諱諱鳴呼鳴呼喜喜の小身身ああげげ捨捨とと惡惡の小キキな

事事の今頭頭其其趣趣回回よよるる所所以以識識ららば必善善
事事の今頭頭其其趣趣回回よよるる所所以以識識ららば必善善
事事の今頭頭其其趣趣回回よよるる所所以以識識ららば必善善
事事の今頭頭其其趣趣回回よよるる所所以以識識ららば必善善

丙一三七九〇號
五十四

藏書
同書

に向ひく退ちひ不善去く顧カク之レは是夫日
日に名利の場小馳て財色レ思ひレくはば豈
善道小趣く日あレさや悪積レ罪大レしレく
掩フホひ解トクふレ終小名レ穢ケガレ身レ亡
一レ家レハレらんノのレみレれレ自レ言ヒくレ福ヲ中ニ誰レ
ク恨ウラひレべシ

享保三戊戌より東東北命に依りて諸州城地
及び山嶽等の東西南北ハくレくレくレ記ス

免まらレむ

京師大佛殿方廣寺大像の涅槃ハニ相カクハレ昼ヒく今年

己亥二月份養ニ聞フ幅ハ九間長ハ十余間ト

云

東福ノ在ル北殿テウテン司所ス因ル改ル字ウツヤクヤク

虞谷翁武城西清戸少シて春寒乃一詩ハ吟
しテ或人小示ス予代リて其韻ハ知ル

開キ去ル梅窓ハ花ハ發ツ辰チ還テ留ル殘レ雪ハ覆フ清ク真ク

関河千里都城夢

柳色緑寒二月春

諸家中世以來家紋あり其中に立花家ハ祇園守岩城ハ漏月と代々紋ニヤリ是名以知らざるハ多ク

大岡ノ本七本ノ事ニシテ此類多ク予先小所著ノ家紋ノ記小詳ナリ

輪王寺 白光 一品法親王公寛享保三戌戌六月

天台座主 宣下

青蓮院宮座主五月の木
比祥表伝ノ次あり

河上京ありて

有栖川ノ宮ヨリ

リ其日

勅使院使等参向ありて

勅命以宣給ひ堂上諸家集會拜賀大饗

侍り 翌日十四日座主ハ参内院参 同

月廿六日御登山廿七日三塔河洋堂あり

山城国久世村

に貧父あり

市ノ傍トハアト
肥前ノ産ナリ

單の綿衣一ワニワハ夏冬とあり眼ノ鏡や

この物何ぞバ帯ホリて外に衣帯なるアリ

毎に鍬釜の鑄懸りノ事を業トシ賃以得

きバ餅酒たき買く食一銭なるきハ二日三
日も食や次隣人食代ふもきと受ず舎を
釜一口酒注一口鑄業の箱一ツより水器財
なきよき目ふハ狂気も食の正体なる凡
情なり一享保二酉三月六日隣人の友木履
呼て幸來心ゆふなりゆ一多ひ一夏
我明日往生一侍る酒酌く浮
世の名残やんとて一ツあね釜代彼友と

て代なり酒求めゆと二人心よりあき飲
と翌七日のあき共小念佛と徳利をよ
七鐘木にと碎破一辛月の願ハ備は南無阿
ふありありや徳利往生ととととと
頻小念佛今ハ佛の途へたすふととと顔
表色ありとととと猶仏名代唱へと正
念小息絶あり一五十口祈の万福寺より道
場小葬て済清と法名や後小人と立入て

跡取去るしめし小常ありし所の礎も反古
粘置しりさやくの事書きし中に

身代省をばむ駭小不異飲食有餘残軀以

養三界ハ是奮宅の如し誰びり恐も誰しと

耻何ともの悲愁せん嗚呼世ハ皆其夢

哉

なごえししいのなる人のとてふや只独り
ありて日頃酒飲好んかろし此男とて折小

と覺ちらむしりばよに残り多げめてメ々

し納めし扱と身ハ風顛漢のさるしりし

者と又し朝夕さうし念佛してめで

し往來を遂し去年東ふて京なる人語

了たりししとて海小涙落きたるし覺

し世小ハ殊勝げなり後世者ともし思し

と其心虚假を懐き名のため利のため小を

りりるし夏少くし終焉の際も何さす

身はりし間きく類了て侍れ小其貧民の云
為至誠に願を信じて往生はぬがひよく念
佛して西邁して侍るなりそむく比叡山は
延昌僧正いさぶ下藪めて修行の時京北の
山中小行暮小家小侘て宿まに主は老法
師もれが程しく物荷して歸り夜ぬけが
た小浴して別小造りて小菴小入り朝小至
ちて高声念佛してくは僧正去思ひ賤し員

しほを似ぞわく行ドもふをいゝなる夏を
し法師云己い堅しくあさき身めう
可食物なけきば餅取れ取て残しるは馬牛
の肉取取持て來てそきびくらく過侍る然
る小念佛より外つとしるるふも年比小成
侍る死ありし時ハ必苦なるべし此所ふ寺建
たあ今日譲を教と契ひるや其後と家
の過く三月の暮方に戸は扣く誰ぞと問は

一に先よ北山キヤクにて契キ中チウをケイ巧カウおク侍る今
此ノ界キヤク去キリ極樂キョク不フ定テイ代ダイはハく系ケイり侍るなり其
由ユ代ダイ告コ中チウこんコンたタめメありして去キぬヌと思オモふフ
とト有ユ後ゴえエりつツとトめメとト女子コノのノ侍シ代ダイ彼カとト
おオしシとトアアそソ思オモやヤしシひヒとトふフらラりリ一イチ夜ヤめメで
いイくク念ネン佛ブツしシてテ失シぬヌれレしシ其キ妻メあアくク語ゴで
一イチとトおオんン其キ後ゴ僧ソウ正セイ村ムラ上ノのノ皇ミカドおオかカくク語ゴし
てテ其キ可カ小コ一イチ寺テ代ダイ建ケンてテ禰ニ陀タ洛ラク寺ジとト号カウやヤしシよ

イニハカレシ
一昔お洛小コのノ侍シる

天曆三手四月九日供キョウのノあり
扶桑畧記ボクサウリヤクキ小コるルきキりリ日本ニッポン記キ畧リヤク子シ

延喜エンキ宣ノボ旨ノボ代ダイ蒙モウりリ初ハツ願ガンのノちチ
なナまマしシ事コトありリされレハ念ネン佛ブツとトいイやヤんン人ヒト

ハハ下ゲしシひヒ一イチ代ダイのノ法ホウ代ダイくクくク学ガクをヲこコもモ一イチ文モン
不知シラのノ愚グ鈍ドンのノ身ミおオしシ居イ入ニ道ダウのノ無ム智チのノ輩ハヒりリ
曰イハしシてテ智チ者シャ此コノ奉ホウ勤キンとトすス代ダイくクくク只シ一イチ向キョウ小コ念ネン
佛ブツとトいイしシ吉キチ水スイ此コノ大ダイ師シ遺イ誓セキ小コ記キしシもモひヒしシ
代ダイくクくクもモもモ机キ悟ブとトあアるル念ネン仏ブツ者シャ多タかカるル小コやヤ代ダイ
ふフくクくク古今コキンのノ代ダイとト見ミ聞クンあアんン人ヒトハハつツやヤくク

建志運心等虚空界 防非塞念在毫釐間

圭峯大師宗の警語也

牟尼世尊五濁小降一穢小投一器小隨て大
小權實の教以立故に其同一あり其以均て
如きく俱に是正直の以以示一證悟の門
以用きく遂小佛果小むらひく方便のこ
豈是非と彼以是とせんや其法は其大道
小通する者少く其小徑小走以く偏小自

勝他劣れ見以生じて世尊れ遺法壞乱せり
凡そハ各自其業稟以て戸牖とく面く自
義以用悵一經論以て干戈とく互小相
攻撃と情ハ函失小隨て遷変一法を人我以
遂て高低とく是非の紛拏誰能くこれを
弁折せんや蓋一宗源の本末以分別一頓漸
此異同權實の淺深以明く以て法義の
差殊以正しべ身莫實小容易あらんや我し人

る新代是として他代諱妬せ給ふ御親氏の
宗代立く其廢立小執を執ると等しくかゝるや
。色欲の戒儒小教にありき代重くは以嗚呼ヨリ
姿目代蕩のカウカウ狡謀心と鉢其禍ハクヤ鑊ハクヤより
と惨イハレ燎原リョウゲン火よりと烈リキ古より女
禍カ子罹カ下カて身代竄カ家カを亡カし国代失ふ人
和漢万くあるりカウキ牧誓カウキ牝ニ鶏ニの戒谷風静カ女カ
刺カより晋献漢成唐玄等の類ニ社ニ席ニ其愛ニに溺カ

世遂ふ天下の乱を召く者多し禍胎カウキ乱萌カウキ固
圍カ此中に伏カる我代不知あり貴くはく賤く
なく只彼惑故ありカやカ詞色カ經カ羅什カ云カ意カ著
して自患へ先ふカ免カせカ厄カとカして至
らざる復たなり一度これカを離カるカてカ代カ得
るもカ又カ顧カ念カセカバカ西カレカ獄カより出カて還カる
又入カるカてカ云カんカるカてカ心カ代カ遠カ離カるカて
身カ或カハ不カ浄カの觀カをカなカしカ或カハ聖カ像カ小カ録カしカ或

に... 其違境... 恨む... 社... 怨... 一... 世... の... 人... 小... 報... ひ...
歴劫^{リヤクキョウ}流轉^{ルテン}の基... 固く... 亦... あり...
寛^{カン}家^ケの悪... 縁... ち... せ... ね... 厭...
さ... づ... よ

戊戌五月東都町^{トウ}江^カありて男色の恨不堪
... 少年^{シヤウネン}又^ニ傷^{キヲ}... 男... 小^コ街^{カチ}... 死... 親

家^ケの... 類^{ルイ}ひ... あり... あり...
... 近世^{キンセイ}都^ト鄙^ヒけ荒^{アラ}惑^{ダク}甚^シ多^タ利^リ鳴^ネ
... 呼^{コエ}... あり... あり...
孔安国^{コウアンクニ}云^ク攻^ク劫^{キョウ}曰^ク冠^{クワン}殺^シ人^ニ曰^ク賊^ト
去^キ年^{ネン}戊^{ツチ}我^ガ府^フ下^ノの男^ヲ先^ニ小^コ養^{ヤウ}子^シと^シなりて追^ツせ
し父^ノ家^ニ入^リと^シ其^ノ姪^ヲなる^ヲ廿^ニ日^ニ殺^スり家^ノ財^ヲ盗^ム
名^ナ古^コや真^{マコト}田^タ河^カ後^ノ信^{シノブ}房^ノ異^イ名^ナ 去^キリ^テが天^{テン}綱^{カウ}の^リを^カり^テや^が
十^{トウ}二^ニノ^シト^ク云^フ
侯^{コウ}使^シ青^{セイ}木^キ山^{サン}ら^ニ生^シま^りの^信 今^{イマ}年^{ネン}壬^ニ子^シ三月^ノ二^ニ日^ニ火^カ刑^ニ小^コ交^{カウ}や^ら

に^レ其違境^ヲを^レ相^レ不^レ念
恨^レむ^レ社^子と^レ放^レす^レ怨^レ世^ノ人^ノ報^レひ^レ
歴劫^{リヤク}流轉^{ルテン}の基^ヲ固^クく^レ亦^レあ^レす^レ
寛^{ヤニ}家^ゲの悪^ヲ回^ル縁^ヲた^レき^レこれ^ヲ厭^ハ
ざる^レづ^レよ

戊戌五月東都町^江あ^レて男色^ノの恨^ヲ不堪^ナ
ず^レ少年^ヲ又^ニ傷^レて男^ハ自^レ尽^セり^ト
あ^レれ^レなり^ト其他^ノ男女^ノも^レ小^{十ニ}街^ノに^レ死^シ親

家の^ノ近^クなる^レ類^ハあ^レり^ト
近^ク世^ノ都^ノ鄙^ノい^レ荒^ク感^甚多^ク鳴^ル
孔安^ノ国^ニ云^フ攻^ム劫^曰冠^殺人^曰賊^ト
去年^戊我^府下^ノの男^先小^養子^トなり^テ追^せ
し^父家^ニ入^ル其^姪なる^レ女^ヲ殺^シ家^財盗^ハ
家^小放^火去^リが^天細^ノの^りを^切り^や
く^殺ら^せて^今年^亥二月^二日^火刑^小変^やら

...
...
...

しる其前二日獄屋此前に縛して罪状残勝
く犯人のえらふふしてえやむる小合府
此土庶集りえおま盛なる市小三坊り夫是
戦國の土敵火殺害とせうして人のむけ初
め竊取いふめいざられ功くはる大
小到致者和謀方くく是亦特奪り民小のた
めに三軍死奪り毎乃め獨夫以伐く太平の
基^{モト}に用くはら聖人の徳小証るの言あり

あや賊は賊は争致して民賊^{モト}は行る魚類
か^{モト}はく^{モト}は貪るもの^{モト}はく^{モト}はく^{モト}はく^{モト}
是より^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}
時に^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}
今^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}
小^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}
一^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}
人の^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}は^{モト}

なる者也凡そ念佛此万行小超過也教者末
法造魚の下軍十念の功業を以て守りて毎
漏無生の報土は生かば法性の本理小對違を
教が故也是大悲出世の本懐なりと云但し
無常行生を以て生かば過の邪見沙紀
隨記隨懺のふふらん人の故起の念願成
攝續して却て無趣小波を前むらん云云
あるつよ事なり

或人茶屏小書一よ一詩を望みしり於て詞
いひては終り終りしり終り終りなり
やゆられけりしり終り終りなり
松風金鼎起り
夢破竹窓辺
物外凌霄翼
翾々乍欲仙
又
一鼎花馨別領春
碧流來月問芳津
清風吹去武陵雪
塵外豈無掃玉塵

と書て下りり
岡田某信書ハ
武井某筆之ヲ

乞亦此時の紀念歟

法三宮 仁和寺院家記 法三御子 拾遺集

元寛平法皇の皇子トキヨ親王ヲムロ御室ミムロに心入

室ありて真叔と称せし法三宮ハ三宮ナリ

して法三御子ありて故あり法親王也

法三の字と曰く但し後世ハ此号を記さず

四履 三代実録貞觀
六年四月ノ記 法三御子に曰く
四至ヲシキト
讀ムナリ

东西南北東町と云く之ノ所の河也たゞくハ此所の地
に至ル所と云クナリ

大江匡房卿二條宮念ふ所は文庫院道下

書籍多ク納むる所は仁平の法三御子

ノ焼亡ノある所は續古事記小記ナリ 我回
文庫

今此所の地

寛憲深秘抄に等持院殿 五條の俊成卿

此屋地小玉津宮院御経賢法寺院彼別當

藏小補也云々事あり今此新玉津宮の江

なり貞治六年二月廿三日新玉津浦の歌合

小拂子左為を

冷泉の為邦のあし口一あ合よるゆ

け社ハ 昭下後成所建らき一が荒廢也

後小海無二一仲一初あ合よるゆ

近は多ふ人凡流のきつあけり一とと又
一時場の変れ

藻薺菴 サリナリ 長唄 ナガウタ 風車軒 フウクルマ 夕顔菴 セキガナ

かゝ顔形多ふり今れ学舎あまを成和凡の
俗流のそと嘲す行。あや寺小を懐え菴

柳学寺

遷達山路遠

空聴斧斤音

のぶきしめいふにそねいしむせむらひのたのむるもの
そ川のゆいぬのむのまじりしむらひのたのむるもの

冬河人良尚天野 隱逸傳のまじり一首づ、歌り

つらゆもく

牡丹花老人

此のゆいぬに細いものまじりしむらひのたのむるもの
予れ其数にまじりしむらひのたのむるもの

予れ其数にまじりしむらひのたのむるもの

空也上人

世の細いものまじりしむらひのたのむるもの
高野山のあつと云所小不ミカズナ蒔菜とて自然

生の菜あり味尋常

のふくいとよ

大師そのり

種初てぬく毎にありてまの代す下ま

やぶとちのいぢり

と生菜とすきよ此山の院、其賜ミキとゆは

教と一奇夏ナル歟

仁王經に三界の外別に一衆生とありと云
りてこれ外道に説きしめて七佛の所説小
らむと瑠璃經と同後に亦大論に別に清淨回
土を以て三界外出と云つりけ故は後学守
養界外にて三界の内と外と異なる異論あ
るに多し迷悟に淨穢を分て自力の見解り
止む人非ず夫諸佛の境界何ぞ内外を別

淨土を以てつり唯心に淨土をのび觀し
願力所成に蓮界に疑ひしにゆらに己心
の弥陀淨土のなきをびて十劫正覺の佛体と賤
しむ輩は皆異学異見の人也淨宗の行者豈
あんなら説き以てそのまゝ云べらんやん
ハ三不成此外淨土に建立するると宣られ
し群疑論を見て如何に云ふも

一質不成

淨土穢土互二にして差別あるを以てと執るハ
俗諦恒沙のほとくしん

異質不成

浄土穢土隔別よりてなぐ異處よりと執るるハ

真諦平等の理よりいかり

無質不成

上は浄土より下は穢土よりと執るるハ六凡四生の
因果也

竹窓隨筆

蓮池
大士

あも此をよみていりて辨せしむ

浄土宗此惣安心ハ

心より

厭離穢土欣求

浄土は先

は此は厭

して彼を欣

りて

是虚偽の良此は厭ハ

する者何ぞ

彼を欣

ふらんやん何なりと

淨

淨に希望

あらんハ厭離の心

真実なり

浄土の御溪の志師教へられし昔は今

は浄土の記し彼師の序の如

用意問答を何の傍にわきま

浄土の記し彼師の序の如

右の如く處世若大夢、經云却來觀世間猶如

夢中事若と云い如と云ハ已を不しして喻

多言之究極して言ハは皆真夢なりと云壯老

死生して又死か生して又死か不知死して

去我不知一夢之然冥然一夢之生
劫自知ら地獄鬼畜人天に流轉し升て又
沈み沈んで更に升る皇の然と一夢之生
生万劫自知らざるは真夢にあらずや古詩
云枕上行時春夢中行尽江南数千里の嗚呼
我人利名に牽れく万里に往返する者豈必
し一枕上の然とせんや莊周蝴蝶と夢
其蝶成夢のりし時を亦夢なり夢に夢成

かゝる世路を走つて東武り
在り公館に彼れを故郷にゆりて茅
屋を眠る往々皆夢なり憂去若樂今何れ在
る

世の中は夢なりと云ふは初りなるがごとく
身も心も海上人
新續古今
心海上人

たりやぬれ神れ道成聞か
延昌延運源弘平荒木田重治
大中臣師尋平時電等
今ハ名の負海して登霞夢む
東會
延住

成を了りて五里をのり西を流川に落入り
死や其夕べも風あり氷降て雷鳴り
鬼より其家の河をり一落くるにかや日
は悪心の負よして人をあぶる行り
女なりとぞ又ゆづ月の末府下の市人玉屋町東がらの意
参宮路より四日市場まで心乱自害しそん
や我同行將にゆり北七日に凡参宮ハ六色
は禁法ありてかろそめゆり思事あるに難

難れ下輩ハ清火齋戒も不及家成出て
乃より参地より類古今神崇よあへおと
之因に何ぞ大神宮神異記 考へんし
人多む心傷く可也
此春丹波国千丈原と云山家ありカハバシ蟬地出多
人我惱や一将人銃ヲウチウチとしてあそめしそとの
地頭某へえせ給ふとて東都へ首をとり持
行三月中うゆりゆりし人々もよとて

別可一

一、能殺

出世此善根被害能惠命と奪とこれに又魔あり大論
小入り罵意經少と五鬼と説く

二、外道

人外して悪行とありしひん云ふあれは又九十六種あり
華嚴大論等に云ふ其説廣博なり

三、惡鬼

身障難して善道と退轉やしひん云ふ鬼類も亦甚
多し正法念經及瑜珈立世等の諸論も悉し

四、惡神

心障導して善行を暴棄やしひん云ふ甚種類多し
孔雀經入楞伽經及び俱舍論諸論も悉し

大般若經魔事品等の諸經大論起信等諸論
其他諸師の釈考一見するは凡そ佛法の
障難やれの欠つらば世間一切の度障あり

每遂に不善の夏となるも皆魔羅波旬ハシニニカ

所為と知益べし其對治ヲホロクのありし

四種此對治の如きは真教大師往生秘觀等

小出たてしきハ愛論れ繫縛して魔のおそ

治しきものなるは中く近き戀慕ヒホして

おしつら煩悩或增長し或ハ嗔火は身或燒

死名利の路に困苦し類皆魔事なりし

了人習ふやゆる俗間魔の心ハ外より來

耳終物との更知了く己が受想行識即魔な
る夏我不知諦理よ乖て自の志情に随ふ
外道なりし覺ち次貪吝憎惡此念盡惑顛倒
の思を我かゝ悪鬼惡神とれりぬれ夏我の
すきて人歎の私我張了大に椅あれば外
鬼我攘む外神我祭る事至愚るいふべしに
や不詳皆己より招く夏儒家此常談にして
今此四子六經我学ぬ者たれ皆敬に君臣理

我究言正しく行直して凡そ世の違順に於
く情能安忍するや初はまら人我より況天
我くく身此不善我省うぬ多し昊天罔極
の孝我思り多報国致命此忠我つとれなる
ら虽火の如我邪智我術い毎学我慢了不告
輕く己に尤も自驕傳らん類是も亦外道の
尤我そのとくふるぬるも

三代の下講学漢唐が盛ありとと高祖の陸

賈に於ては文帝の賈誼に於ける武帝の董
仲舒に於ては共亨道に問治に問くは欲
すはハナリハナリ議者高祖に諸王死
得ざるの恨に云む審食の宮闈に瀆乱也
呂氏の漢家を禍也一等議と文帝理に窮
るの心有て賈誼に造るの学なり一故に
徳終に古に愧る夏ありと云ひ武帝の学
於ては徒に聞て不学徒に知て不行遂に奢

淫の失窮共此禍奸邪に讀巫蠱の獄父子隔
絶也一云は後漢ハ光武の賢経術に致す
多れ前代に於ての君なり然るは正后に瘵
太子に易諫臣に殺や一夏に教く顕宗は高
致に教を褊察に一一好下耳目の隠發に以
て明とすと誅に肅宗は尊経事師前人に不
媿をさく無逸の戒忽にさる知ありと毀る
夫より以下唐太宗学に好む情に経術に留



